

# 筑波大学附属図書館とオリンピック

大久保明美

はじめに

筑波大学附属図書館では、前身校の東京教育大学時代からオリンピック関連資料の収集を行っている。本稿では、本学とオリンピックの関わり、収集されたオリンピック資料、貴重な資料を公開する特別展の開催などを中心に紹介する。

筑波大学とオリンピック

嘉納治五郎は、筑波大学の前身である高等師範学校・東京高等師範学校の校長を23年にわたって務めている。講道館を創設し柔術の普及に尽力したことは周知のことだが、教育者として体育・スポーツの発展を推し進め、オリンピックの招致に深くかかわった人物でもある。1909年に日本人初のIOC委員に就任し、ストックホルム大会に日本選手団を参加させており、その選手の1人が東京高等師範学校の生徒だった金栗四三である。その後も嘉納はIOC委員として、アジアでのオリンピック開催に尽力する。

筑波大学では、嘉納の体育教育の教えを受け継ぎ、多くのオリンピック・パラリンピックメダリストを輩出している。柔道では谷本歩実（アテネ、北京ともに金）をはじめ20名のメダリスト、体操では加藤沢男（メキシコから3大会連続団体金）をはじめ8名のメダリスト、さらにパラリンピックでは水泳の第一線で活躍した河合純一など、多くのメダリストにより、現在までに110個のメダルを獲得

するに至っている。

また、東京2020オリンピック・パラリンピックに積極的にかかわるために、「筑波大学オリンピック・パラリンピック総合推進室」を設置し、本学のオリンピック・パラリンピックに関連する事業を発信している。

<https://opop.tsukuba.ac.jp>

オリンピック関係資料の収集について

本学におけるオリンピック関係資料の収集は、前身校の東京教育大学体育学部が収集したコレクションがもとになっている。1964東京オリンピック関係資料として整理された資料は、図書、雑誌、漫画、報告書、写真集からパンフレットの類まで、その資料の多様さから、東京オリンピックの記録を後世に残そうとした気概が感じられる。

筑波大学は、東京教育大学の移転を契機に、1973年に開かれた大学として開学、体育学部は体育専門学群となり、修士課程や博士課程も設置され、国立大学初の体育専門の総合的教育研究機関が誕生した。その際、前身校で収集されたオリンピック関係資料約300点は、散逸することなく本学に引き継がれたが、2009年に整理されるまで、その存在は影を潜めていた。

その後、幻となった1940東京オリンピックに関する資料や、1964の公式ポスターなども収集し、現在、筑波大学附属図書館におけるオリンピック

関係資料は1,300点を超えている。今後は、東京2020オリンピック・パラリンピック関係資料の収集も行い、コレクションのさらなる充実を目指す予定である。

### 特別展の開催

筑波大学附属図書館では、毎年テーマを決めて特別展を開催している。令和元年度は、11月1日から12月6日まで、中央図書館において「令和元年度筑波大学附属図書館特別展～東京1964と日本文化について考える～」を開催した。



▲特別展のポスター

本特別展は、日本がどのようにオリンピックを受容し、東京開催を実現しようとしたのかを、附属図書館所蔵の貴重な資料から考えていくもので、本学における「東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会参画プログラム」の一つとして開催された。

展示は3部構成となっており、1部では、1964年の東京オリンピック開催に至るまで、未開催に終わった1940年、これから開催の2020年も含めて、招致活動に関する資料を展示した。いずれのオリンピック招致活動においても、東京そして日本を紹介する資料が作成されている。本学附属図書館では、1940年と1964年に東京への招致のために作成された写真集を所蔵している。特に1935年に作成された写真帖『日本』は、美しい内容で好評を博したと言われている。

1960～1964年にかけては、大会組織委員会が大会の準備状況について、競技施設、競技日程、日



▲写真集『日本』1935

本文化を紹介する冊子を発行している。さらに、大会を盛り上げる広報として、東京オリンピック公式ポスターが4種類作成された。東京オリンピックのシンボルマークとなっている第1号ポスターは有名だが、第2号ポスターで陸上選手のスタートダッシュの写真を使用し、オリンピック史上初の写真を使用した公式ポスターとなっている。また、第3号では力強く泳ぐアスリート、第4号では聖火ランナーの写真を使用している。今回の特別展では4種類のポスターすべてを展示し、オリンピックの雰囲気を感じることができた。

また、開催決定後はオリンピックについて国内で紹介した資料や、英語で日本の文化を紹介する資料も出版されている。『Tourist Library』は、当時の鉄道省国際観光局によって発行された日本文化を紹介するもので、全40冊からなり、温泉や柔道、相撲などさまざまなテーマが含まれている。



▲『Tourist Library』1935-1942

一方、小学校、中学校、高等学校等の生徒が、オリンピックの理念を学ぶことができるように、

1964年にはオリンピック読本、2016年にはオリンピック・パラリンピック学習読本が配布され、オリンピックを教育の中に取り入れることに成功している。1957年に発行された小学校国語の教科書には、IOC総会において東京への招致演説に使用された「五輪の旗」のエッセイが掲載されており、日本の子どもたちがオリンピックを理解していることのPRに役に立った。

第2部では、オリンピック開催中の雑誌記事や芸術展示の資料を紹介した。当時のオリンピック憲章には、オリンピック開催国で芸術展示を行うことが定められていた。東京においても、浮世絵、版画、古美術、写真等を紹介する展示に加え、記念歌舞伎公演も行われており、それらの関連図録等を展示した。

オリンピックは、新聞はもちろん、雑誌でも特集が生まれ、それぞれが工夫を凝らし大会の見どころなどを紹介している。当時の『少年サンデー』は、開催期間中にオリンピック特集として選手村の様子や、マラソン競技に関することなどを漫画で表している。また、女性週刊誌でも、オリンピック特集記事を掲載しており、特別展来館者からは、当時を懐かしむ声が多く寄せられた。

第3部では開催後の報告書や写真集を展示し、全体では個人蔵の資料も含め47点の貴重資料を公



◀『少年サンデー』  
1964.10

開した。また、展示室では、東京1964オリンピックの際に国立競技場に掲げられた五輪旗、オリンピックを記念して作成された貯金箱のコレクション、過去のオリンピック公式マスコットなども展示し、好評を博した。

会期中には、展示を企画した本学教員による特別講演会「文化としての東京オリンピック」、およびギャラリートークも開催された。講演会では、東京オリンピック開催のビジョンとして、①オリンピックムーブメントへの貢献、②近代西洋と伝統文化の融合、③大震災からの復興について、本学所蔵資料を中心に説明があった。オリンピック招致のために、東京の都市機能や伝統的な美しさを、さらには日本固有の文化を世界にアピールし、オリンピックという文化を受け入れることが出来たことなどをさまざまな資料を通じて感じる事ができ、東京2020オリンピック・パラリンピック大会への関心を高めるイベントとなった。

#### ■特別展公式 Web サイト

<https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/exhibition/2019/index.html>

#### まとめ

筑波大学は、日本で唯一の「スポーツ・オリンピック学学位プログラム」を持つ、オリンピック教育研究機関であり、嘉納治五郎の精神は現在においても脈々と引き継がれている。筑波大学附属図書館は、今後もオリンピック・パラリンピック関係資料を積極的に収集し、貴重な歴史資料として後世に伝えていく役割を担っていきたい。

#### 参考文献

- ・令和元年度筑波大学附属図書館特別展図録、筑波大学附属図書館、2019
- ・気概と行動の教育者 嘉納治五郎、筑波大学出版会、2011  
(おおくぼ あけみ：筑波大学附属図書館)

[NDC10 : 017.7

BSH : 1. 筑波大学附属図書館 2. オリンピック]